西方の諸島における先住民の神秘的な生活とその文化について

悠里（Jurli）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イェクト・ユピュイーデャはｐｈｉｌ．８０５年から８０６年の間に、貿易のために上流階級でラネーメ共和国に船で行こうとしたところ、船が座礁し、沈没、デーノ共和国の未接触民族であったパイグ人（ｐｅｒｇｅｒ）に接触した。レアディオ人であり、パイグ人には高魚（ｓｕｅｌ　ｍｕｉｌ）と呼ばれた。遭難してパイグ人に助けられて、パイグ社会で四年間生活した。８１０年にパイグ族によってレアディオに戻され、そこで経験したサームカールト（ｔｈａｒｍｋａｒｌｔ）の儀式や皇論信仰（ｔａｒｍｚｉ）の神秘性や美術性に目を取られ、リパラオネ社会に向けて「西方の諸島における先住民の神秘的な生活とその文化について」を発行した。本は全リパライン語圏で大量に売れ、印税収入によってユピュイーデャは貴族と大差ない大金持ちになった。

目　次

Phil. 805年8月12日 ―― 1
一、神使到来 ―― 3
Phil. 805年8月13日 ―― 5
二、人眠至極 ―― 7

Ｐｈｉｌ．８０５年８月１２日

ポケットに手帳があったから、取り出して書き出した。本当に奇妙なことだ。いつまでここに居なくてはならないのかは分からないが、そのうち忘れそうなのと、死んで骨を拾う者が私のことをちゃんと覚えていられるように書き留めておく。

私の名前はイエクト・ユピュイーデャである。アドラバ貿易商社に努めている貴族の商人である。私は三日前からレアディオのグラルテゾ・グノガルドゥンからラネーメ共和国に向けて船で向かっていた。すると、大嵐がやって来て、船は操舵不能に陥ったのだ。私にとって始めてのこの状態には驚かされたものの航海士を船の中から見ていることしかできなかった。しばらくすると、地図の航路上には存在しないはずの陸地が見えた。その数秒後に我々の船であるアクルサー号は酷い揺れに襲われた。航海長によると座礁してしまった可能性が高いとのことであった。それから、我々の船は嵐に煽られて、船内には水が大量に入ってきた。座礁した船底は激しい嵐の影響でさらに削られ、私は海に投げ出された。最終的に船がどうなったかは私は知らない。粉々になって今頃木片になっているかもしれないし、今も座礁した位置に止まっているかもしれない。

奇妙なことに私は助かっていた。目をあけると部屋の中に横にさせられていた。自分はてっきり助かってレアディオか少なくともリパラオネ人の国家に漂着したのだろうとぬか喜びをしていたのだがそうではなかった。

私が起きると、すぐにラネーメ人のような人種の人間が私を見て驚いていた。何やら話しかけているようであるがまったく分からない。リパライン語も通じず、大学に通っていたときはラネーメ人の言語は少しばかり齧ったもののそれも通じなかった。相手方は非常に細かい音に切って喋っており吃音のようであったが、どうやらこの国は全体的にそうであるらしかった。服装はといえば文化的に貧弱なものであった。私が寝かせられていたときにすでにきていた服装はまさにそれでまるで麻袋で服を作ったかのようで繊維の色が完全には抜

けていないものだ。自分の肌には馴染みそうもなかった。
その屋外にでて始めて気づいた。皆この服装をしており、同じような言葉の喋りかたをしており、建設されている建造物も非常に粗悪で洗練されていないものに見える。屋外に出るとすぐに銀髪蒼目の顔立ちが違う私がよほど物珍しいのか市民たちが集まってきた。ここに住んでいる人たちは非常に好奇心が強いようにみえる。彼らにも出きるだけ分りやすい標準的なリパライン語で話しかけたがまったく理解してもらえている様子はなかった。
外に出ていたのが分かったのか、その家の主である女性が自分を引き連れて部屋に戻した。言葉が通じるようすはなかったので、何かとジェスチャーすると怪訝な目で見られた。とにかく先ほどまで寝ていた場所を指差して何かいっている。多分、まだ寝ていた良いと言っているのであろう。確かに体中が痛んでいることにはこの時始めて気づいた。麗しい女主人に感謝して寝床につくことにした。

一、神使到来

五九四七、七月

某日

今朝、潮の様子を見に行くともう既に人がやって来ていた。しかし、どうやらそれは　陸の方からではなく、海の方からやって来たようだ。まだ死んではいなかった。髪は老爺の白、目は瑠璃の青だった。しかしそんなに老いている風でもなかった。神が彼を遣わせでもしたのだろうか。一体、何のために？

神の使いならば、いつまでも考えを巡らせている訳にもいかないと、ひとまず応急の手当をするために、彼を家に連れていくことにした。

見るに、余り怪我も多くなく、回復は早そうに見えた。服はボロボロであったが、絹の上物だったので、生地を繕って彼に返すことにしよう。それまでは多少馴染まないであろうが、四　之　衣（*arp a tarkk）［＊1］でも着てもらうことにしよう。

しばらくすると、彼が気がついた。

聞きたいことは山ほどあった。

「汝　来　何　処」（*mrwa sarkk narn khure?）［＊2］

と聞いてみたが、全く応じず、我々の言語を知らないように思えた。

すると彼は何かを話し始めたが、あれは言語だったのだろうか？言語とは言えぬような音だった。理解することはおろか、単語の境目さえ分からなかった。非常に興味深かったので、ここに書き留めておく。

「処　魚　魚　米　須」（*khure-muri muri mor liu?）

しばらくするとまた異なる言語を話し始めた。彼の音声我らの言語の片鱗を見、祖先の語の類かと思って返してみたが、通じてない風だった。

しばらく見ないでいると、彼はいなかった。家の外を見ると、彼がいた。民々に囲まれているようで、何か問題でも起きやしないかと連れ帰ってきた。

「汝 言 我 等 言 而 行 此 善。」*mrua zerpp prai go zerp wa morkk kar kaitt.

言っても通じていないようだが……。

そういえば、彼はしきりに手元に何やら書いていたな。小さなボロボロの帳簿のようなものに、筆にあたるであろう棒を彼らの言語と同じく、風のよう、波のように素早く書き留めている風だった。我らの文字は箱を置いていく風なのに対照的で極めて興味深い。今後言語が通じるようになったら、彼らの文字と、彼らの言語について聞いてみよう。

脚注—西方の文化固有のものについて特に記す。

［＊1］四之衣…西方の衣類の一種。布を4枚縫い合わせ、頭を通す部分に穴を開けたもの。

［＊2］ここでは理字で発音を示したが、実際には燐 帝 字 音 *lin jor a marn などと呼ばれる文字を用いる（図1参照）。以下異文字はこれ。

Ｐｈｉｌ．８０５年８月１３日

部屋に戻されてしまった、と思ったら疲れ切って倒れて寝ていたようだ。

どうやら私は、今はあまり外に出ないほうがいいらしい。彼らが一気に集まってきて、私に対して何を思っていたのか良く分からないが、今はここがどこで、彼らがどのようなものたちで、中央教会［＊1］に対立する人間かどうかというのは重要なことだ。

もしかしたら、ここに類まれなる炭鉱や金銀財宝を取れるような土地があれば彼らから買い取って、或いは彼らを労働者にしてここを文明化するのもよいだろう。

そんなことを考えているうちに、私は奇妙なものを発見した。壁に掛けられた厚そうな紙に黒い塗料で何かが塗られている。これはこの地方独特の絵なのか、それとも魔よけのような何かなのか、とにかく奇妙だが、何か吸い寄せられる魅力を感じる。

「善 来……（kait sak2……mua2 et2 a tal ua, nan2 aim2 ak2?）汝 一 之 目 而 何 在 書？」

じろじろ見ていたからに、部屋に入ってきた若そうな女主人が怪訝な顔で呼びかける。これが何なのか訊ければところだが、彼らの言語が良く分からない。何とかして「これは何ですか？」くらい訊ければばいいものを、言語を通じないとは全くもって不便で心細いものだと思った。

私はしかしこの時質問の訊き方を理解するための一つ方法を思いついていた。

手帳を開き、ぐちゃぐちゃな線を書いて女主人に見せる。

「此何（kal nan2）？」

なるほど、今意味不明なものを見せられたからきっと「これは何？」と訊いているに違いない。多分「何」を表す単語がｋａｒｎａｎなのだろう。

今度は私は、貼ってあった黒塗料の何かを指して”Ｋａｒｎａｎ”と言ってみせた。しかしながら、彼女には通じていないようであった。必死にその掛けられているものを指で囲いながら言うと得心し

たようすで次のように答えた。
「汝（mua2）心（hial）言（zep2）『此（kal）何（nan2）』噫（a）！」
うーん、”ｋａｒｎａｎ”を繰り返しているようだが、良く分からない。発音が悪いんだろうか？女主人を見ているとそれぞれの要素を指してこう言った。
「皇（tam2）、心（hial）、在（aim2）、真（tit）」
どうやらこれは絵や魔よけの記号ではないらしい。読めるということは文字なんだろうが、ぐにゃぐにゃしすぎていて、何が何の音に対応しているのか全然分からない。しかし、これが文字なのであれば何かを表しているのだろう。そんなことを考えているうちに、外から声がかかった。
ふと見ると、そこに居たのは髪が金色の女の子であった。

二、人眠至極

家に連れて帰って、彼らの文字と、彼らの言語について聞いてみようと思っていたが、彼は疲れていたのか長く眠っていた。恐れるほど長い眠りだった。起きたかと思うと、壁に書けていた掛け軸の前でそれをまじまじと見ながら、座っていた。長年の苦心、ついに私の芸術の理解者が現れたか！　しばらく鑑賞の時間を与えてあげよう。

―と思ったが、何かがおかしい。

彼は全く動かないのだ。芸術の鑑賞ならば、近づいて筆脈を楽しんだり、遠くから全体の雰囲気を楽しんだりするはずだ。どうも彼は私の芸術に惚れたとかそういうのではなかったようだ。残念、残念だが、まあ仕方あるまい。しかし、ならば何が楽しくてそこにずっと座っているのだろう。

そこで問う。

「善来……（kait sak2……）汝一之目而何在書？（mua2 et2 a tal ua, nan2 aim2 ak2?）」

しまった。見るに全く通じていない。言語が異なることを完全に忘却していた。ここからどうやって彼と交われようというのか。悩んでいるのをよそに彼は考え事に耽っていた。

すると彼が動いた。おもむろに例の紙と棒で何かを書き始めた。しかし、その書きようは彼らの字を書くというよりは、我等の字を書くもしくは絵を描くようだった。まさか、この一瞬でこれを得心したというのか。興味深く眺めていると、彼はそれを察したのか、さも自信ありげにそれを見せてきた。

―それは見たことも無いものであった。彼らもこの種の文字を使うのか？　そう思ったがため、私は尋ねる。

「此何？（kal nan2）」

そして、彼はたいそう喜んだ。なにか彼は聞き間違えをしたのか？

しきりに私に向かって何かを語りかけてくるが、得せず。しきりにその掛け軸を指で囲み、ようやく得る。

―そうか、彼は「これが何であるか」と聞きたかったのか。

そして上から、

「皇，心，在，真」(tam2, hial, aim2, tit)

と説明すると、彼は大層驚いていた。何に驚いていたのかは分からないが。とにかく驚いていた。

やはり異国の人のようで、流れるように言うがために、我等の言語で喋っているとは思わなかった。(pai2 ge zepl)

やはり興味深い声の流れである。ぜひこれを習得し、柔軟に意思疎通が取れるようになりたいものだ。近頃の人は保守に凝りすぎ、何の進歩も生んでないようにさえ思える。ときに神使、これも皇心であろう。またこれは燐帝の心であろう。

「心　古　行　新」(hial sial mokl lu2)の伝である。

なんてことを考えているうちに、外から誰かが呼ぶ声がした。その声の主と先に目があったのは、私ではなく、彼の方だった。